初詣と冷たいコーヒー

きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初詣と冷たいコーヒー

【Ｎコード】

Ｎ２９２１Ｊ

【作者名】

きい

【あらすじ】

正月に地元に帰ったときに飲んだ、冷たい缶コーヒーの話です。

いつもよりもとても寒い正月の夜でした。

都心から片田舎の地元へ帰ると、昔の、今は少し老けた仲間達が駅まで
大して変わらない格好で出迎えてくれました。

久しぶり、お前も老けたな。さくっと飲んで初詣いこうぜ。
今年は大吉が出るまでおみくじは引かないとな。五円玉たくさん持ってきたぞ。

そんなことを話しながら、まずは体を温めにと、居酒屋へ行き、
積もる話なんかをしていたら、あっというまに夜更けになりました。

居酒屋から神社までは歩いて十分ほどで着きます。そこには人が溢れていて、
境内には厚着をした人たちが所狭しと集まっていました。

片田舎で、ここにしか神社がないのかといった様子のその混みようは想像以上で、
参拝まで二時間近くはかかりそうでした。

並んでいても最初のうちは、酒の力もあり、会話も弾んで身体も暖かでしたが、
一時間も経つとさすがに身体も冷えてきて会話も尻つぼみになっていきました。

そうしていると友人の一人が「熱燗でも買ってくるよ」
と、列を外れて出店の並ぶ方へ背中を丸めて駆けていきました。

その間も半歩の歩幅でひょこひょこ歩いて、
小刻みに肩を揺すりながら行列はちょっとずつ進んでいきます。
しこたま呑んだので正直もう酒はいらないんだけどね、
戻りが遅いと合流できなくなるよなぁ、でもそれも笑い話になるね。
なんて話していると、思ったよりも早く友人は戻ってきました。

「人が多くて出店まで行けなかったから、これ買ってきたよ。」
そう言いながら差し出す手には缶コーヒーがありました。

酔いが冷めちまうぜ、熱燗が良かったなぁ、とさんざん言われながらも、
その友人はまぁまぁ、これはな、まずは飲むんじゃなくて手に持って身体を暖めるんだよ。
飲むのはそれからのお楽しみだよ。と笑顔で答えます。

渡された缶コーヒーは私の冷えた手では持っていられないくらい熱く、
皆、まんざらではないようでした。

そして参拝も済み、じゃあまたね、と解散しました。私一人だけが電車で、
他は家が近いのでタクシーで帰っていきました。

駅に着き、ホームに降りると、そこはしんとしていて、
空に星があるのが見えました。私は空を見上げながら始発電車を待っていました。

始発電車が来るまでにはまだ少し時間があるせいか、
暗く寒いホームにはあまり人影はありません。

ふとベンチに目をやると一人、座っている男性がいます。
その男性は外国人らしく、歳は二十五歳前後といったところでしょうか。
大きな荷物を足元に置き、寒そうに縮こまっていました。

その風貌は旅行者のようでした。そういえば正月観光に来る外国人が多いと
聞いた事がありますが、ひょっとしたらその男性はバックパッカーで、
日本の正月に合わせてやってきたのかなと思いつきました。

外国から見る空は同じに見えるのだろうか。もっとたくさんの星が見えるのだろうか。

そんなことを考えていると、その男性のことが気になってきました。
でも話しかける語学力は持ち合わせていません。

私は自販機で缶コーヒーを一つ買い、
寒そうにしている彼に近づいて行って差し出しました。

彼は驚いた顔をして少しためらったようでしたが、
それを手に取り、なにかを言いました。

サンキューでは無かったのですが、
きっとそういう意味合いの言葉だったんだと思います。

缶コーヒーを開けようとする彼に「ウェイト」と言いかけて、あぁ英語じゃなかったなぁと思い出し、とりあえず「ちょっと待って」と日本語で言いました。

缶を握ったり、頬に当てたりとジェスチャーで「最初は飲まないで使うんだよ」と語りかけると、彼はそれを理解したようで、ニコっと笑顔を返してきました。その瞬間、言葉は通じませんが、ちょっとだけ分かり合えた気がしました。

それから私はまた先程の場所へ戻り、また空を見上げました。さっきよりも少しだけ明るくなる空が、そこにはありました。

ふと私の前を一人の女性が通り、ベンチに向かうのが見えました。すると、

「ごめんごめん、電話が長くなっちゃったよ。ホームは寒いね。上で待ったほうがよくない？」

振り返ると、女性は確かに日本語で彼に話しかけています。私はびっくりしてしまいました。

「ねぇ、どうしたの？」女性がさらに話しかけます。

彼はなんともいいようのない苦笑いの表情を浮かべています。彼の顔を見ているとすぐに目が合いました。彼の顔を見つめると、たぶん私も同じような顔をしているだろうなと感じました。

彼は立ち上がり、近づいてきました。

「あの、コーヒーありがとうございました。その……」

「コーヒー」と言って、私はわざと彼の言葉を遮ぎりました。

「飲んでね。日本の缶コーヒーもなかなか悪くないでしょ。ちょっ

とぬるいだろうけど」

彼はニコっと明るい笑顔になりました。「ぬるくありませんよ。ずっと温かいです」

一礼して彼は彼女のところへ戻っていきます。

私はまたしばらく空を見上げていました。そしてポケットの中から、お参りの時に友人が買ってきた缶コーヒーを取り出しました。

もう、冷え切った手でも難なく持てます。タブを起こしても、湯気なんかさっぱり立ちません。

それでも一口だけ飲んでみると、確かにそうだと思いました。

温かなままだなぁ、と。

（後書き）

年末大掃除をしていたら、出てきたものです笑
正月らしい話なのでＵＰです＾＾ｖ
ちなみに創作物語です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2921j/

初詣と冷たいコーヒー

2011年1月26日00時21分発行